

一般口演

1 中国医学と道教（Ⅻ 韓国医書について）

吉元 昭 治

一、緒言と目的

中国と日本との間にあって、彼我交流の中継地としても、朝鮮半島の位置の重要性は今更、言うまでもない。半島は医学の方面では、古くから中国医学の影響を受け、我が国に及ぼしたそれもまた、はかり知れないものがある。しかし、中国医学をとり入れたといっても、半島特有の土壌、民俗性などから独自の発展、成果をあげ、のちに東医学という医学を確立していった。この方面の研究では、我が国では、三木榮氏を第一とする、その広汎、確固たる研究は、半島医学の全体にわたり詳細を極めている。さらに

氏は、半島医学に対する道教の影響―道教医学にも着目され、ふれる処がある。今回は、これらの点について若干の考察を加えたい。

二、本論

半島医学書の中から、主な次の三種をえらび、さらに演者が、ソウル市で採取した、民間療法書について検討を加えた。

(1) 医方類聚（李朝。世祖。金礼蒙他、一四四五～一四七七 年）

この頃すでに、半島独自の本草書『郷薬集成方』があったが、『医方類聚』は全卷三百六十五卷、唐、元、明初の医書類百五十三種から編集された。ここで注目されるのは、『卷五、五藏門』の「五藏六腑図」で、これは『正統道藏』中の『黄帝五藏六腑補瀉図』『上清黄帝五藏六腑真人玉軸経』また『雲笈七籤、卷十四』の『黄庭遁甲緑身経』、さらに『遵生八箋』（明、高濂編）のなかの『四時調攝箋』と同じといえよう。さらに『医方類聚』の各項の終りには、『巢氏病源』などからひいた導引法がある。その

百九十九卷から二百五巻までを「養生門一七」にさいている。内丹、外丹、服餌、却穀、撰生など、道教医学そのものがある。

(2) 東医宝鑑(宜祖。許浚著、一六一三年)

本書は、半島医学を代表する巨著であり、中国と半島固有の医書(八十六種の名をあげている)を合せて、内景篇、外景篇、雑病篇、湯液篇、鍼灸篇等からなっている。このうち、内景篇の初めの「集例」では、精気神にふれ、道教經典の『黄庭経』の内景を参考にしたといい、「道家以清静修養為本、医門以薬餌針灸為治」ともかいている。ここで重要なのは、李東垣を北医、朱丹溪を南医とし、自分の国は「僻在東方」だから、国の医学を東医とするといっていることである。三木氏は、この内景篇をもって道教がそのバックボーンになっているといわれている。その他、外景篇の臍では、灸臍得延年が、雑病篇婦人では、安産方位図、藏胎衣吉方、催生符、借地法が、鍼灸篇では諸経導引など、道教医学の色彩が強い部分がある(処方数約四〇〇〇)。

(3) 方薬合編(高宗。黄泌秀選、一八八五年)

『東医宝鑑』をもととし、それにつづく『医宗損益』『医

方活套』などから、抽出、簡便化したハンドブック的なものであるが、韓国では現在でも多種のものが出版されている。本書の特色は、上段に「薬性歌」が、下段を三つに分け、それぞれ上統(補方、一三三方)、中統(和方、一八一方)、下統(攻方、一六三方)の計四六七方があるが、人参配合処方数はそれぞれ、七〇、五四、八の一三三方(二八・三〇)となっている。本書についても、やはり道教医学の痕跡をみる事が可能である。すなわち、初めに、「保生大道」「須識扶陽説」があり、さらに、精気神の代表症状とそれに対する薬方がある。また、薬性歌や処方の中にも、その説明に、呪術的、方術的なものがあったり、薬名にも道教的な臭いがあるものもある。また「造軽粉法」など、水銀製剤の製造法もある。

(4) 奇経八脉单(著者および出版年不明、手書)

本書は一〇・二×一七・五cmの大きさで、李王朝末期に流行した袖珍民間療法書の一つとおもわれる。前半四〇頁は、奇経八脉を中心とした鍼灸療法が、後半十一頁は、救急、符呪などがしるされている。「急々如律令」とか、各種の符をみることが出来る。この小さい書から、民間療

法、道教医学、および実際の医学が一つの場を共有していたことが、つい一〇〇年前位にもあったことを知ることができる。

三、結 論

韓国の代表的医書三種と、民間療法袖珍書のなかから道教医学の背景について考えた。道教、ひいては道教医学が、強く、長く影響したことがわかる。これらの点につき、さらに研究をすすめるつもりである。

(順天堂大学産婦人科)

2 小野蘭山・蕙畝の日記にみる

医学館の本草講書と薬品会

遠 藤 正 治

前回は、小野蘭山とその後継者小野蕙畝の日記によって、医学館におけるかくれた業績として薬園の経営があることを紹介した。今回は、同じく『蘭山先生日記』と『蕙畝日記』から医学館における本草講書と薬品会に関するいくつかの事績を跡づけることができたのでこれを紹介することにする。

一、蘭山と本草講書

蘭山は、京都から出府した四日後の寛政十一年四月二日、若年寄掘田正敦から医学館での講書を命ぜられた。以来、死の前年の文化六年に至るまでの十一年間、六次にわたる諸国採薬の期間と医学館が焼失した文化三年を除いて、本草講書に携わり、毎年十二月、その褒賞として銀七